

# 文化映画

## 渡部 実

### 田中純一郎と仕事 映画にかけた生涯

第1回日本映画史フェスティバル実行委員会/日本大

学芸術学部映画学科作品

【スタッフ】共同研究メンバー  
(五〇音順)・石田基貴、小笠

原隆夫、斎藤裕人、泰弘、城山

俊明、高野徹、鳥山正晴、長谷

川一己、廣澤文則、丸山博、宮

澤誠一、八木信忠、渡辺豊、共

同研究アシスタント・メンバー  
(五〇音順)・牛山健、池口泰

生、上倉泉、鬼頭政裕、高根沢

聡志、藤原照雄。完成・98年、

16ミリ・26分。

【内容】この映画は映画史家と

して『日本映画発達史』『日本

教育映画発達史』などの著作を

世に出した故・田中純一郎氏の

私自身は生前の田中氏にはお

会いしたことはないが、その著

作は何よりも映画への信頼に支

えられつつも終始、客観の記述

に徹した学者としての純粋な研

究姿勢を感じさせるものであつ

たと思う。それゆえ、その著作

は時代を越えて信頼に足りる価

値あるものとなったのであろう。

映画は田中氏の生い立ちから

語り始める。1902年(明治

35年)に群馬県新田郡に生まれ

た氏は17年、尋常小学校高等科

卒業と同時にジャーナリストを

志して状況する。以来、給仕、

丁稚奉公を経て生活をしていく

うちに映画に興味を抱き始める。

決定的な影響を受けた作品は

「イントレランス」であったと

いう。また若き日に肺炎を発病、

帰郷、闘病生活などの生活を体

験したことも紹介される。23年

には映画雑誌「活動倶楽部」の

編集部に入り、これ以後、映画

史の記述を専門とする氏の基本

姿勢が確立する。東洋大学は中

退するも、26年にはすでに「日

本に於ける活動写真発達史」を

まとめ、30年には「キネマ週

報」を創刊、また戦争中は映画

の脚色も手掛ける。戦後は「映

画評論」「シナリオ」各誌に論

評を執筆。そして、さらに52年

には「キネマ旬報」誌に入社。

ついに57年に1923年より執

筆にとりかかった『日本映画発

達史』を34年の歳月をかけて完

成させる。それは劇映画だけで

はなく、短編、記録などのあら

ゆる分野の映画が網羅されてい

るといふ画期的な仕事であった。

映画はそのような氏の歴史を

年代的に描く一方、石原慎太郎

原作、市川崑監督の映画「処刑

の部屋」での道徳的批判に対し

て擁護に回るといった積極的な

氏の姿勢も紹介する。このエビ

ソードが本編の中で具体的な説

得力を持っている。田中氏は58

年より日本大学芸術学部で後輩

の指導にあたり、89年に87歳で

亡くなった。

映画は田中氏の写真、生前の

姿を写した8ミリフィルム、か

かわった雑誌、著作などを数多

く紹介し氏の全貌に迫ろうとし

ている。

もともと本編は、群馬県新田

町で開催された第1回日本映画

史フェスティバルの一環として

日本大学芸術学部が映画製作を

依頼されて作った作品。評伝映

画の趣きがあるが、作り手であ

る在籍の学生が恩師ともいえる

## 福 江 島

映学社/メディア東京作品

感染症予防法成立記念映画

【スタッフ】原作・音楽・監

修・水島裕、演出・高木裕己、

脚本・高木裕己、水島広子、プ

ロデューサー・長谷川聡、撮

影・堀田泰寛、照明・外岡修、

録音・井上幸雄、美術・江波裕

二、【キャスト】江藤潤、森下

涼子、坂西良太、仁科貴、赤間

麻里子、弓恵子、小泉博、特別

出演・秋山恵美子(ソプラノ)、

田中氏の半生をこのような形で

映画化することには共感を覚え

る作品である。(問い合わせ先

「第1回日本映画史フェスティ

バル」事務局 TEL027

6・57・2222)

## キネマ旬報社の本

キネマ旬報・臨時増刊

映画賞・映画祭  
データブック映画賞・映画祭  
データブック映画賞・映画祭 受賞一覧○映画界年表  
世界の主な映画祭○映画祭早見表

アカデミー賞/ゴールデン・グローブ賞/カンヌ映画祭/ベルリン映画祭/ヴェネツィア映画祭/キネマ旬報賞/ブルーリボン賞/毎日映画コンクール/日本アカデミー賞/フランス・シネマ大賞/ニューヨーク映画批評家賞/ルイ・デリュック賞/カルロヴィ・ヴァリ映画祭/ベルリン国際映画祭/ジャン・ヴィゴ賞/モスクワ映画祭/ジュルジュ・サドウル賞/東京国際映画祭/アヴォリアッツ国際ファンタスティック映画祭/サンダンス映画祭/映画芸術ベストテン・ファーステン/ぴあテン&amp;もあテン/韓国映画賞/横浜映画祭

定価2500円(税込)  
■B5判■240頁

2ととも「福江島」

16ミリ・100分。

【内容】福江島は長崎県の五島列島にある日本の最西端の孤島である。この映画はその福江島を舞台に新型インフルエンザの脅威と予防をテーマにした劇映画である。

福江島は昔から隠れキリシタンゆかりの島といわれている。島の自然風景が美しい。この島には著名な音楽家、北風りんたろうがいた。今、彼、りんたろうの曾孫で女性ピアニストがりんたろうの曲を引いている。彼女はりんたろう没後80周年の記念コンサートの練習をしているのだ。そのリハーサルには同郷人で現在は医者として著名な五島英一(小泉博)が立ち会っていた。五島の側には幼い彼の孫娘がいた。

事件はほどなくして起こった。地元の町の診療所には何故か、

重症のインフルエンザの患者が次々と運び込まれてきたのである。小さな町はパニックに陥った。

同じころ、隣国の中国の奥地でもこれまでにない悪性の新型インフルエンザが蔓延し始めていくという。五島英一は研究者の医師からこの新型ウィルスの塩基配列がスペイン風邪と同じであることを告げられる。スペイン風邪は80年前に猛威を奮ったもので、あの音楽家りんたろうもこの風邪に罹って死んだのだ。

りんたろうばかりではない。福江島で五島と一緒にピアノを聞いていた五島の孫娘も感染をしてみよう。しかも孫娘は肺炎も併発しておりかなりの重症である。

それより映画は五島医師たちの新型ウィルスに対する必死の奮闘ぶりを描いていく。この状

況そのものがドラマとして成立するのは日本の感染症対策が欧米先進国と比べ、著しく立ち遅れているからである。エイズ問題にしても同じであろうが、ワクチン接種や研究体制などの不備が問題であるという。

そのような現状であるから新型で悪性の病原菌が蔓延した場合、医者たちの苦労は想像を越えるものがある。これはドラマであるが、原作者の水島裕氏は実際の医者であり、その訴えかけるものは切実なものがある。

やがて新型インフルエンザの正体がホンコンX型であることが突き止められ、五島医師たちは急遽、対策を講じるもなかなか打開策は見出せない。その理由のひとつに現実には日本ではすでにワクチン接種の義務づけが廃止され、急いでワクチンを製造することが困難であるなどの

具体的な理由が伝えられる。

やがて一人の医師が現在、開発中であった特殊なワクチンの実用性を訴える。それは鼻から吸引する「鼻ワクチン」といわれるものであったが、上司たちはワクチンの実験が人体実験となる疑義も出され、厚生省への働きかけには消極的であった。しかし、時間は切迫している。

医師たちは何とか打開策を掴み、人々を助けなければならぬ。

映画は福江島のロケーション撮影をふんだんに駆使し、インフルエンザの感染症という重いテーマをドラマとして見せていく。原作者が医師であることからワクチンへの啓蒙映画として見ることもできるだろう。異色の映画である。(問い合わせ先

映学社 TEL03・3359・9729 代表、FAX03・3359・9584)